
日本語研究の近代化過程と西洋哲学

釘貫 亨

1 日本語研究の近代化と研究理念への模索

明治以後の日本語研究は、西洋言語学の理論と方法を学ぶ中で幾度かにわたる葛藤と論争の過程を経験した。我が国における西洋言語学の移植は、明治19年(1886)帝国大学文科大学博言学科の教授に就任した英国人チェンバレン Basil Hall Chamberlain に始まるとされる。帝国大学でチェンバレンの教えを受けた上田万年は、当時における言語学の最先進国ドイツに留学し、帰国後明治31年(1898)帝国大学に国語研究室を創設し、教授に就任した。この時をもって近代的な国語学が開始されたとみなされる。しかし、これはあくまで制度としての意味しか持たず、明治初年以後から当時までの日本語研究に近代化の過程が存在しなかったわけではない。言語学を導入する前の明治前半の日本語研究は、平安時代以来の伝統的な学問である悉曇学や漢語学、国学、洋学などを原資として『音韻調査報告書』(国語調査委員会、明治38年1905刊)を達成した。旧仙台藩士大槻文彦は、十余年を費やして『言海』(明治19年1886刊行開始)を独力で編集した。大槻は、『言海』『語法指南』を増補した最初の近代的規範文法書『広日本文典』(明治30年1897刊)を編集した。大槻は、言語学ではなく17世紀以来、西洋諸国に起こった各国語の規範文典と近世日本の国学の語学的業績を参照源とした。明治前半期までの日本語研究は、江戸時代までの伝統的な学問だけに依拠しながら、自力の近代化をある程度実現していた。言語学導入前の日本語研究は、極めて高い水準にあった。

一方、19世紀後半の言語学は、音素文字であるローマ字を基にした精密な音声記述を背景に、音声の歴史的変化の法則性の解明に至っており、当時の日本語研究が到達しなかった特徴を備えていた。比較言語学の古音分析の方法を資源にして歴史的研究に動機を持たない実学的な性格を持つ音声学が興隆してきた。帝国大学令発布の年(1886)には、パシー Passy、ジョーンズ Jones、イエスペルセン Jespersen、スイート Sweet らに

よって国際音声学協会 International Phonetic Association が設立されたほか、ローマ字に加えてギリシャ文字などを利用して、各国語表記の綴り字による読み癖を超越した普遍的な発音表記である国際音声学字母 International Phonetic Alphabet (略称 IPA) が1888年に制定された。西洋の言語研究は、各国語の個別研究から一般言語学への道を歩み出していた。

言語学の方法に基づく日本語研究である国語学は、上田万年によって音声の歴史的変化の解明（「P音考」）において最初に試みられた。次いで上田の弟子である橋本進吉が仮名遣いの研究に端緒を得て、古代から中世に至る歴史的音変化を記述することに成功した¹⁾。言語学の影響は、国語学において歴史的音変化の解明に最初に反映した。

西洋言語学は、国語学の側からおおむね好ましい受容を以て迎えられた。それは、伝統的日本語研究がその根幹部分を古典語研究に負っており、言語学がもたらした音韻変化を解明する方法は古典語学と葛藤を起すことなく、その欠を補強する内容を持っていたからである。

他方、言語学導入前からある程度自前の近代化を実現していた文法学は、山田孝雄『日本文法論』（明治41年1908）に至って最初の記述文法を達成し、同時代には松下大三郎『日本俗語文典』（明治34年1901）『標準日本文法』（大正13年1924）が出た。これらの業績には、西洋各国語文典の影響とともに心理学や哲学からの影響が濃厚に認められる。近代の日本文法学は、西洋の品詞分類の方法を最もよく学んだのであって、その源泉は比較言語学であるよりは各国の個別文法とその源泉であるギリシャ語ラテン語文法であった。

伝統的日本文法学は、鎌倉時代以来テニヲハの学と言われるように、助辞、用言の活用形態など、多く古典古文の文末表現にかかわる観察を主としてきたのであって、品詞分類にかかる研究成果は相対的に希薄であった。伝統的テニヲハ学では、所与の古典古文から助辞類を切り出して分析することが方法上、優先された。これは品詞分類を最初に行う西洋文法と対極的な認識方法であった。

明治以降、日本語研究が古典注釈から近代的国語政策の実現へと学理的目標が展開した。これにかかわって文法教育や西洋式辞書制作への需要が起り、品詞分類を重視した文法学の必要性が浮上してきた。明治初年以來、洋学系と国学系の語学の間を振幅した結果、和洋の文法学を適切に折衷した大槻文彦による最初の完成度の高い近代日本文典が実現した。大槻の仕事は、日本語とはどうあるべきか、いかに記載されるべきかという近代的国語政策の根幹に関わる要請に対応した規範文法の達成であった。それからまもなく言語学が紹介され、言語の観察は、どうあるべきかではなく、どのようにあるのかという科学的認識へ軸足を移行した。山田と松下は、規範ではなく日本語がどのようにあるのかという、記述の側面に重点を置いて自らの文法体系を構築した。

山田は、後述するように生きた言語場におけるまとまった思想の表明である「文

sentence」の定義に強い執着を持っていた²⁾。山田は、「統覚作用」という概念を用いて単語や文を定義した。山田の「統覚作用」の概念は、後述するようにヴントの心理学、さらにはカント Kant の哲学の「統覚」に由来する³⁾。

個別言語研究から一般言語学への流れは、主としてイギリスで発展した音声学のほか、大陸では比較言語学の内部からフェルデイナン・ド・ソシュール Saussure が出現して画期を形成した。彼の講義録『一般言語学講義 Cours de linguistique générale』(パリ、1916年)が他国訳に先駆けて日本語訳が昭和3年(1928)『言語学原論』(小林英夫、岡書院)として上梓された。他国に先駆けて日本語訳が先行した理由は、おそらく当時の我が国の言語研究に於いて、言語とは何か、という根本的な問いかけへの機運が醸成されていたからである⁴⁾。時枝誠記は、ソシュール理論に正面から挑戦し、言語過程説として知られる独自の行動主義的な言語論を展開した。時枝理論の背景には、時枝自らが語ったところによるとエトムント・フッサール E. Husserl (1859-1938) の現象学があった⁵⁾。

一方、近世の音韻学以来の伝統的教養を背負った言語学者有坂も、「音韻」とは何かという概念規定に熱心に取り組んだ⁶⁾。有坂の心理主義的な「音韻」の定義に時枝は支持を表明したが、それは有坂の論理構成が現象学的性格を持っていたからである。

山田、時枝、有坂らは、それぞれ研究分野は違っているが、二つの共通点を持っている。その第一は、彼らが西洋の言語理論の単なる紹介者やその図式的応用者でもなく、中世以来の伝統的日本語研究の成果を近代化するという強い使命感を持っていたことである。彼らは、押し寄せる西洋の言語理論に対抗意識を持ちつつ「文」とは何か、「言語」とは何か、「音韻」とは何か、という本質問題に果敢に挑んだ。第二点は、彼らがそれぞれの課題を規定するに当たって、既存の言語学ではなく山田はカントの形而上学、時枝と有坂はフッサールの現象学というドイツ観念論哲学をその理論の拠り所に求めたことである。

本稿は、伝統的日本語研究の近代化に苦闘した三人の日本語研究者と西洋哲学との関わりとその精神的意味について考察したい。

2 山田孝雄とカントの哲学

山田孝雄の文法論を代表する著作が『日本文法論』(宝文館、東京、明治41年1908)である。『山田孝雄博士著作年譜』(山田孝雄博士功績記念会、宝文館、東京、昭和29年1954)によれば、本書を構成する予備的モノグラフは存在せず、これがすべて書き下ろしの一書であることが知られる。我々は、山田の思索の形成過程を今のところ、草稿その他の原資料によって再構成することができない。

山田の文法理論を特徴づける基本概念として「統覚作用」が知られている。それは、

ひとまとまりの思想の表明である句（文）の成立要件とされる。言語伝達の要素というべき単語が生きた会話において用いられる場合、通常、複数の単語が同一話者によって一挙に配列される。それが単語の無意味な羅列ではなく、意志伝達が実行されていると考えられるとき、その単語列は「文」と呼ばれる。単語がどのように配列されれば文が成立するのか。どのような条件が整えば、文と呼ばれるに相応しいまとまりのある内容が成立するのか。このような根本的な問いを発したのが山田孝雄である。山田は、単語を配列して有意味な思想にまとめ上げる精神の作用に注目して統覚と呼んだ。

今なほ立ち入りて文法学の内容につきて論ぜむ。吾人の精神は或実体、或感覺、知覚、或感情、欲求、又は事物の關係、様式等を個々に思惟す、しかして一方には又之を統一して一思想として思惟す。吾人の心的作用に分解と統合との二方面存する事実によりてなり。之によりてこの分解の結果吾人の一觀念と認むるものを代表するもの、之を単語といひ、単語を材料として統覚をあらはすものを文といふ。

『日本文法論』「序論」 3 頁

山田によれば、文には単文のほか複文のような複雑な構造を持つ種類があるので、文の直接の構成要素は句である。句は、単語から構成されるひとまとまりの思想の表明であるので、文論の基礎には句論が存在すべきであるとする。（同書「序論」 9 頁）

山田は、自らの文法論を立ち上げる際、ハイゼのドイツ文典、スイート Sweet の英文典に依拠した。

本論を草するに当たりて古今の文法書の稍可なりと称せらるゝものは力の及ぶ限り参照せり、然れども著者常に僻地に在り、加ふるに便少く未だ尽さざる点あるべし、外国の文典に至りては英文典の代表として「スキート」の新英文典、独逸文典としては「ハイゼ」の文典、この二書を主なるものとして参照したり。この故に単に英文法、独逸文典といはば右の二書の所説をさすものと知るべし。

『日本文法論』「緒言」 4 頁

しかし、山田はハイゼやスイートの文法によっても満足な文の定義は得られなかった。山田は、両文典の記述に注目しながら、次のように批判している。

スキート氏は曰はく、

A sentence is a word or group of words capable of expressing a complete thought or meaning .A sentence is, therefore, “a word or group of words whose form makes us expect it to express a full meaning”. We say “expect”, because it depends on the content whether or not any one sentence express a complete meaning. Thus such a sentence as **he is coming**, though complete in form, shows on the face of it that it is incomplete in meaning, for **he** means “some one who has been mentioned before” and makes us ask “who is he?”. Nevertheless **he is coming** is a complete sentence because it has the same form as **John is coming, I am coming**, etc, which are complete in meaning as well as

form -as far, at least, as any one sentence can be said to be complete.

これを以て見れば我文法家の所説の英文典などに胚胎せることを見るに足る。ペイン氏も亦

Any complete meaning is a sentence.

といへり。ざるにても complete thought or meaning とは如何なるものぞ。吾人はなほ従来維持し来れる疑問を解すること能はざるなり。こゝに去つて独逸文典の説く所を見む。ハイゼ氏曰はく。

Ein Satz ist ein ausgesprochener Gedanke oder eine Aussage von etwas Gedachtem.

Eine solche Aussage entsteht, indem der Verstand die Einheit einer Wahrnehmung in ihre Bestandteile zerlegt und diese wiederum zu der Einheit eine Gedankens verknüpft.

こゝに於いても亦 ein angesprochener Gedanke oder eine Aussage von etwas Gedachtem. と称するものの本義は明瞭ならざるなり。『同書』1165-1166頁

山田は、文 sentence の定義において、何を以て「まとまった思想 complete thought or meaning」の存在根拠とするのかについては、西洋文典においても未解明のままであるとしている。山田によれば、文成立の根源的要因を明らかにするには、従来の文法学的説明では不十分であり、心理学の成果を参酌する必要があるとする。山田は、文成立の解明のために文法家が挙げるような主語、述語の完備だけではなく、これらを統一する精神作用の解明が必要であるとして心理学者ヴント W. Wundt の論を引用する。

了解活動 (Verstandes function) ノ根本的動機ハ一致及ビ差異ノ識得、並ニ之ヨリ生ジ、之トハ異ナル経験内容ノ論理的関係ノ識得ニ在ルナリ。サレバ了解活動モ亦元来集全表象ヨリ生ジ、現実ナルカ或ハ現実ト思惟シタル多数ノ経験ニ関係ヲ付シ、之ヲ結合シテ統一的一個体トナス。然リト雖モ之ニ次ギテ生ズベキ分解ハ根本的動機ノ異ナルガ為他ノ方向ヲ取ルベシ。即チ此分解ハ単ニ集全表象ノ個々ノ要素ヲ明瞭ニ発表スルニ止マラズ比較作用ヨリ生ズベキ要素相互間ノ種々ノ関係ヲ確定スル事ニ在リ。斯クノ如キ確定ニ於テハ一度種々ノ分解ノ行ハルト共ニ曩ノ関係及ビ比較ヨリ生ジタル結果直チニ之ニ加ハル者トス。了解活動ニ於テハ関係及ビ比較ノ初等作用厳密ニハル、ガ故ニ、其外部ノ形式ニ就イテ云フモ、一層完全ナル状態ニ於テハ確然タル規則ノ行ハル、者トス。種々ノ精神内容相互ノ明覚関係ハ同時ニ非ズシテ継続的ニ現ハレ、從ヒテ常ニノ関係ヨリ其ノ次ノ関係ニ進行スル事ハ想像活動及ビ純然タル記憶活動ニ適スル一般ノ原則ナリ。而シテ了解作用モ亦此原則ニ從ヒ集全表彰ノ論議的分割ナル規則ヲ生ズ。之ヲ論理学上思想形式ノ二元性ノ法則ト云フ。此法ニ從ヒ関係ヲ含メル比較ヨリ生ズル分解ハ、集全表象ノ内容ヲ分割シテ主格及ビ賓格ナル二個ノ部分トナス。而シテ是等各部分ハ又前ト同シク二個ノ部分ニ分解セラレ此分解セラレタル部分ハ更ニ又前同様ノ分割作用ヲ受クルコトアルベシ。再度ノ分割ニ於テモ亦其二個ノ部分互ニ対立シ、其論理的関係ニ於テハ主格

ト賓客トニ均シキ文法上ノ形式ヲ有スベシ即チ名詞ト属性、動詞ト目的及ビ動詞ト副詞トノ形式是ナリ。斯ノ如ク判断ハ明覚分解ノ進行ヨリ生ジ言語上命題トナル。

(訳本ヴント心理学概論)

『同』1175-1177頁

上で引用されている「(訳本ヴント心理学概論)」とは、『ヴント氏著心理学概論』(富山房、元良勇次郎・中島泰蔵訳、明治32年)を指す。引用該当箇所は、下巻第十七章「明覚結合」520頁以下の文章である。

上の「了解活動」とは、人間にとって外在的にモノが存在するという認識活動のことであり、ここではその認識が成立する心理的根源を問題にしている。かかる認識が成立するには上記文章3行目「多数ノ経験ニ関係ヲ付シ、之ヲ結合シテ統一的個体トナス」という精神的作用が必要となる。ところでこの書物の翻訳者は、「之ヲ結合シテ統一的個体トナス」精神作用を「明覚」と訳していることが留意される。「明覚」が Apperception の翻訳であることは、次の文章から知られる。

第十三節 意識ノ本質タル精神進行ノ連結ハ結局常ニ個々ノ意識内容ノ要素相互間ニ於テ行ハルベキ結合進行ヨリ生ズ。斯ノ如キ進行ハ個々ノ精神複合体ノ発生ニ於テ行ハル、ガ故ニ、一定瞬間ニ起ル意識内容ノ同時統一及ビ継続意識状態ノ連続モ亦此結合進行ヨリ生ズ。然ルニ是等結合進行ハ其ノ性質非常ニ多様ニシテ各自特色ヲ有シ、同一現象ノ再現スルコト之レナキモノトス。然リト雖トモ注意ガ一方ニ刺激ノ受動識得トナリ、又一方ニ於テハ其活動明覚トナリテ現レタル特質ニヨリテ、之ヲ大別スルコトヲ得ベシ。是等區別ヲ簡單ニ現ハサンガタメ通常注意ノ受動状態ニ於テ行ハルベキ結合ヲ連合 (Associonen) ト云ヒ、注意ノ活動状態ヲ要スル結合ヲ明覚結合 (Apperceptionsverbingngen) ト云フ。

中巻第十五章「意識及ビ注意」437-438頁

心理学用語 Apperception は、今日の心理学において「統覚」と訳されている。ヴントの書を参考にした山田がその訳語である「明覚」に従わず、今日通用の「統覚」とするのはなぜであろうか。

主体にとって外在的なモノを一つの個物と認識できるのはなぜか。異質で多様な経験と感覚の集合を束ねて一つのモノと認識させる精神的な作用とはいかなるものであるのか。これがヴントによれば「統覚」である。この統覚の論理構成は、カントの形而上学に由来する。山田は、「統覚」の訳語を哲学書から得たと思われる。

山田は、『日本文法論』第二部、第一章「句論の概説」1180頁において、「桑木氏哲学概論」なる書物を引用している。山田の言う「桑木氏哲学概論」とは、桑木巖翼『哲学概論』(東京専門学校出版部、明治33年刊)を指すだろう。桑木『哲学概論』では、Apperception を「統覚」と訳している。

経験的対象は、現象の普遍必然的結合なり。夫れ単に現象を見れば質形共に多様なり。

之を結合して始めて経験を作るを得ざれば此結合は経験の所生にあらず。純粹或は先天的と称すべし。此結合は三様に分る。(一) 感覚を知覚すること (二) 之を再生すること (三) 之を識認すること、是なり。(一) 知覚は直観に於て総合せられ (二) 再生は想像に於て (三) 識認は概念に於て総合せらるゝものなり。此三作用は固より相俟ちて存するものにして、殊に想像の如きは其中間に位して恰かも (一) (二) を結合するものと見るべきか。然も経験の結合は、第三の識認作用によりて始めて完全となるべきなり。此の如く識認は悟性の最高作用にして、凡ての変化に対して独立なるべきもの、之によりて真の総合をなすべきものなるが故に先天的なり。吾人の認識は一に此先天的な意識統一による。之を名づけて先天的統覚 (Transscendentale Apperception) と云ふ。是に於てか吾人の経験的認識は全く此統覚による者にして、現象の経験となるは此作用によるものなるを知るべし。換言すれば吾人が経験と称し自然界と云ふものは皆吾人の意識によりて統合せられたる写像に外ならざる也。

桑木巖翼『哲学概論』220-221頁

上はカント『純粹理性批判 Kritik der reinen Vernunft』(A版、1781年)における「感覚の多様 das Maningfaltige」を統一する三つの基本的な精神のはたらき (三段の総合) を解説した部分である⁷⁾。当時、『純粹理性批判』は未邦訳で大正10年(1921)天野貞祐訳によって岩波書店から出版された。上述中の「先天的統覚 Transscendentale Apperception (今は「超越論的統覚」と訳されることが多い)」は、多様な諸感覚を「一つのモノ」としての認識にまとめ上げる最高の悟性的統合概念とされ、カント哲学の中核理論と位置づけられている。ヴァントが主張する統覚は、カントの統覚に由来する。カントは、いま目の前にあるモノが何故ひとつのモノであると了解することが出来るのか、「目の前にモノが在る」という認識の根拠はどこにあるのかという根本的な問いを発した⁸⁾。ヴァントは、自らの心理学を立ち上げる際の原資に、カントの Apperception を援用した。山田は、ヴァントの訳本ではなく、桑木の哲学書から「統覚」の語を得たのであろう。

超越論的統覚に関する現行の邦訳では、次のようにある。

直観における多様なものの総合的統一は、ア・プリオリに与えられたものとして、私のあらゆる一定の思惟にア・プリオリに先立つところに統覚の同一性そのものの根拠なのである。しかし結合は、対象の内に存するのではない、また知覚によって対象から得られ、こうして初めて悟性のうちに取り入れられるようなものではあり得ない。この根源的結合は、まったく悟性のなすわざである。即ち悟性は、ア・プリオリに結合する能力であり、また直観における多様な表象を統覚によって統一する能力にほかならない。そしてこの統覚の統一という原則こそ、人間の認識全体の最高の原理なのである。 『純粹理性批判』(篠田英雄訳) 岩波文庫上巻、177頁

感性的直観において与えられた多様なものは、必然的に統覚の根源的、総合的統一

のもとに統撰せられる、直観の統一はかかる統一によってのみ可能だからである。与えられた表象に含まれている多様なものは、悟性の作用によって統覚一般のもとに統撰せられる。 『同』 185頁

山田は、多様な感覚表象をまとめて一つのモノと認識させる超越論的統覚の概念が文成立の条件の規定においても適用できると考えた。外形上、単語の連結であってもそれが文と見なされるには、その連結がひとまとまりの内容を持つという認識が成立しなければならない。当該の認識主体は言語共同体の成員であり、それ以外の間はこの認識に関与できない。この事実は、文の存在根拠が客観的に存在しないことを意味する。われわれ日本語話者にとって日本語文の存在は自明のようであるが、文の文たるべき普遍的存在理由を示すことはできず、我々の直観的判断だけを提示しうるにすぎない。カントの超越論的統覚もまた、類似の認識構造を持っている。われわれの外側にあるモノは、在るように見えるがその存在自体を論証することが出来ない。統覚の由来は、カントが述べるように「対象の内に存するのではない」し、「知覚によって対象から得られ」るものでもないのである。それは、まったくわれわれの悟性の仕業である。次の山田の文の認識に関する記述は、モノの認識に関する超越論的統覚の論理構成と非常に近似している。

抑、文は思想を完全にあらはしたるものなりといへり。単文は単一なる思想をあらはしたるものなりといへり。惟ふに思想とは人間意識の活動状態にして各種の観念が或一点に於いて、関係を有する点に於いて合せられたるものならざるべからず。この統合点は唯一なるべし。意識の主点は一なればなり。この故に一の思想には一の統合作用存す。之を統覚作用といふ。この統覚作用これ実に思想の生命なり。雑多の観念累々として堆積すとも之が統覚作用なくば遂に思想たること能はず。この故に単一なる思想とは一個の統覚作用によりてあらはされたるもの換言すれば統覚作用の活動の唯一回なるものをさすなり。

(中略)

こゝに於いて一の句とは如何なるものなるかを問はざるべからず。今内面よりの観察によれば一の句は単一思想をあらはすものなれば、所謂統覚作用の活動の唯一回なるものならざるべからず。之を外部の方面より見れば、この単一思想が言語によりてあらはされたる一体ならざるべからず。しかもそは他と形式上独立したる一完全体ならざるべからず。 『日本文法論』 第二部「句論」 1183-1184頁

超越論的統覚によって捉えられた対象は、しかしながらその「対象物自体」に対する認識の反映ではない⁹⁾。人間は、モノ自体を認識できない。時間と空間によって限定された主観的存在である人間は、いかなる手段を以てしてもモノ自体をまるごと経験することが出来ないからである。統覚によって捉えられた対象は、そのモノ自体ではなく現象として把握された表象にすぎず、そのモノが観察者の主観をこえて「存在する」こと

の明証を与えてはくれない。この論点が後に物理学者エルンスト・マッハ Mach (1838-1916) の経験批判論やフッサールの現象学に継承され、20世紀における主たる知的潮流を形成する。後述するように日本語研究においても現象学が時枝誠記の言語過程説や有坂秀世の音韻目的表象説に影響を及ぼした¹⁰⁾。時枝と有坂は、観察対象の客観的「存在」より、行動過程や音声の認識のし方を重視した現象学的理論を提案した。ドイツ観念論とその系譜を引く現代哲学が明治から昭和にかけての民族主義的な国語理論に基盤を提唱した事実は興味深い。

超越論的統覚を以てしてもモノ自体は捉えられないとするカント哲学の要点は、先の桑木『哲学概論』第五章において詳しく解説されており、山田はこれを理解したのであろう。句(文)の把握が話者の直観に基づく判断であり、その存在要件を普遍的に論証することは不可能である。山田の統覚作用は、このような文の認知に関与する母語話者の排他的役割をよく言い当てている。統覚作用は、文成立の条件ではあっても存在証明ではない。統覚作用は、多様な用法を持つ単語群を一つの話線上に配列して、伝達を可能ならしめるために言語共同体の構成員が優先的に保有する心理的動力である。山田の文の認知に関与する統覚作用は、自然の認識をめぐるカントの統覚の理論に由来する。しかも山田は、外在するモノ自体は捉えられないとするカントの統覚の本質をも継承していると考えられる。なぜなら、現代文法学においても文の存在は未だ論証されていないからである。山田は、モノ自体の論証不可能性を理解した上で、客観的に論証不可能な文成立の条件として統覚の概念を類推的に適用したのではないか。

3 時枝誠記の言語過程説と現象学

20世紀初頭に比較言語学から一般言語学への橋渡しを行い、共時態の言語学を提唱したフェルデイナン・ド・ソシュールが出現した。ソシュールの *Cours de linguistique générale* (1916) は、1928年に日本語訳された。これに反発し、独自の言語理論を主張したのが時枝誠記である。時枝は、文法学者であるがむしろ「言語過程説」という言語本質論によって後世に知られる。言語過程説とは、言語を既存の存在として見るのではなく、表現過程理解過程として捉えようとする行動主義的立場である。

言語過程説は、時枝の著『国語学原論』(1941年)、『国語学原論続篇』(岩波書店、1955年)において述べられている。『原論正篇』『続篇』ともに、時枝が言語過程説を主張する際には、ソシュールの『講義』を批判している。

時枝は、ソシュールのラング *langue* が学問の対象として「純粹に心的なものを把握したけれども、その方法に於いては、明らかに自然科学的構成観の反映」(『正篇』84頁)であるとして、次のように述べる。

構成的単位を追求する限り、言語の学は、心理学、生理学、音響学等に分散せられ、

その固有の対象を把握することは困難である。しかしながら、若し既に述べた如く、言語の対象に即して、言語の本質を一の心的過程として理解するならば、その過程に参加するものとして、生理的物理的等のものがあるとしても、その過程それ自体としては、他の如何なる過程にも混じらない、そして言語を言語たらしめる一様にして純一な対象を見出すことが出来ると思ふのである。言語表現は、他の思想表現、例へば、音楽絵画等に比較して、単に外部に表現せられる部分即ち音或は色等に於いて相違してゐるといふよりも、そも—の出発点からして異つた方向をとつて現れる表現過程を持つ。これを明かにするには、言語過程に参加する種々な要素の一を除外して見ればよい。概念なき言語、音声なき言語を我々は考へることが出来ない。即ち概念、音声は、言語に於ける並列的構成要素として重要であるのでなく、言語過程として不可欠の段階であり、かくの如き過程の存在に於いてのみ、我々は言語の存在を意識することが出来るのである。 『正篇』 86-87頁

時枝によれば、言語を実体として認識しようとする限り、構成要素は個別科学的分析の中に分散、解消されてしまう。時枝は、言語を概念と聴覚映像の同時並列的結合と捉えるのではなく、言語全体を表現過程、理解過程として捉えることによって概念や音声を統一的に把握することが出来るとした。留意される点は、時枝がこの過程を「心的過程」として把握していることであつて、このことによって対象が一様なものとして純化されると考えた。言語の表現と理解行動に介入する「生理的物理的等のもの」を認識主体の心理によって一度ふるいにかけて、対象を純化された統一体として捉えるのである。時枝の言語観にはまた、ソシュールのラングとは違った方向における心理主義が見て取れる。このことは、後述する有坂の「音韻」観念においても共通する認識である。時枝は、ソシュールのラングを批判して次のように述べる。

ソシュールの設定したラングは、確かに彼のいふやうに、心理的実体であり、それ故に、言語学が、心理学と生理学（或は物理学）とに解体される危険から免れることになるのであるが、いふところのラングは、言語の最も具体的な事実である、表現及び理解の事実とは、何の拘りもないものとされた。

『現代の国語学』（有精堂、1955年）第二節、141頁
ここでは、雑多な対象を純化する装置としての心理を主張している。しかし、たとへソシュールのやうに、これを心理的実体であるとし、表現において使用されるところの資材であるとしても、ラングの人間に対するありかたは、自然が人間に対するありかたと少しも異ならない。従つて、その研究課題は、このやうな実体相互の張り合つてゐる状態（共時態）が実体の変遷（通時態）かに限定されてしまふ。

『同書』 141頁
として、全体としてソシュールの考え方が自然科学的認識の反映であるとして退けるのである。経験に基づく主観的表象による世界把握と自然科学批判は、時枝が傾倒したフ

フッサールの現象学が備えている顕著な特徴である。時枝は、自らの思索の正当性のよりどころを日本の伝統的言語観に求める。

以上のやうな諸々の疑問点を解決するものとして、日本の古い国語研究に現れた考へ方が取り上げられることとなつた。そこでは、言語は、専ら、人間がその思想を感覚的なもの（音声或は文字）を媒材として外部に表出し、また、そのやうな感覚的なものによつて、何等かの思想を獲得する、表現及び理解の行為そのものであると考へられてゐる。そこで、言語が、要素の結合体として、実体化せられる代りに、言語は、人間の心理・生理的過程現象として捉へられることとなる。これが言語過程説（或は観）といはれる所以である。このやうに言語を考へることは、言語を、概念と聴覚映像との結合体であると考へる場合と同じやうに、言語についての仮説に過ぎないのであるが、しかし、それは、我々の、言語についての具体的な経験に対する省察から設定された仮説であつて、経験の奥に、或は、それ以前にあるものとして予見された、ソシュールのラングの如きものとは性質を異にする。

『同書』142頁

日本の伝統的言語観が時枝の主張の通りであるかについては、議論の余地があろう。むしろ我々が注目するのは、引用の末尾の一文であり、時枝がラングを「経験に先立って予見された」と批判していることである。時枝によれば、ラングが経験に先立って予見されたものであるのに対して、言語過程説は、具体的経験から導かれたものであるとする。

ソシュールの『講義』によって広く理解されているとおり、具体的行動過程であるパロールの観察を通じて共時態に共通なラングの再構成に至るとすれば、ラングは直接経験不可能な存在として経験に先立って前提されていると考えることが出来る。

経験に先立ってあらかじめ準備された存在を拒絶するのは、現象学が特徴的に備えている論理構成である。フッサールが開いた現象学やその先駆者であるマッハの経験批判論においては、経験未到の存在を前提的に仮構して論理を展開して行く素朴実在論は排除される。マッハやフッサールの理論は、自然科学の共通認識であつた対象の实在をあらかじめ前提することを拒絶し、認識主体による経験可能な現象から稠密な実証を施してゆくという20世紀以後の知的潮流を形成した。このような存在に対する認識と接近法は、カントの超越論的統覚の理論を継承したものである。

我々は、日常生活者として外在的なモノの存在を前提にして生活しているが、モノ自体を悟性的に認識しているのではなく、経験による諸感覚を統合してその存在を直観しているに過ぎない。モノの存在の認知とは、複数からなる感覚の複合であるに過ぎず、心理作用としての総合 synthesis あるいは統覚 apperception が諸感覚を統一し、モノをモノとして知覚することができる。自然科学の世界把握はこのやうな直観を基礎に置いている。哲学の潮流の一つである唯物論は、この立場に立つのである。世界は、主観的認

識の外側に存在するののかという問いは、形而上学の主要課題であるが唯物論はそうではない。唯物論者は、はじめから主観の外側に世界は実在するという前提に立つ。理論言語学者が唯物論を参照して有益な結果を得ないのは、言語事実の経験のありようが極端に多様で「言語」なるものの共通の輪郭を描くことが困難であり、その存在を前提することすら出来ないからである。ちなみに、マルクス主義に立脚する唯物論哲学は、政治思想や経済学説に比べて我が国への紹介が大きく遅れ、戦前の講壇哲学では全く影響力を持たなかった。出隆、柳田謙十郎らがマルクス主義の唯物論哲学を標榜するのは第二次大戦後のことである。

素朴実在論的生活感覚ではすまされない抽象的事物の存在証明や学理的基本概念の定義などにおいて、経験を越えた事態や存在に対する予断は、注意深く拒絶されなければならない。マッハやフッサールは、それまで自然科学者が共有し、問題として露呈しなかった素朴実在論に疑いを表明した。彼らが提唱した思考法は、20世紀の知識人の思索に深甚な影響を与えた。

省察する者は、徹底した一貫性をもって絶対的な認識という目標に向かいつつ、やがて疑わしくなる可能性が考えられるようなものは、存在するものとして通用させない。それゆえ彼は、経験と思考のうちに自然に生きている時には確かなものも、それが疑う可能性がある限り方法的な批判を向け、疑いの可能性を持つものをすべて排除することによって、おそらく後に残るはずの絶対的に明証なものを得ようとする。私たちが自然に生きている時、世界は感覚的な経験の確信をもって与えられているが、前述の方法的な批判に、この確信は持ちこたえられない。それゆえ、世界の存在は、この始まりの段階では通用させてはならない。省察する者は、ただ自らの思うことをする純粋な我としての自分自身のみを絶対に疑えないものとして、たとえこの世界が存在しないとしても廃棄できないものとして、保持している。このように還元された我が、いまや一種独我論的に哲学し始めるのだ。

フッサール『デカルト的省察』「第一省察」浜渦辰二訳（岩波文庫、2001年）

時枝は、「経験に先立って予見された」ソシュールのラングを排除し、「我々の、言語についての具体的な省察から設定された」行動としての言語を主張している。その根拠が、「我々の具体的経験の有無」に帰せられる。これは、現象学の認識方法に基づくものである。現象学は、人間の認識に限界のあることを自覚して、まずは経験可能な領域から徹底的な分析を加えようとする。現象学の実証主義の前提に人間の主観的経験が置かれる。徹底した経験主義と心理的主観主義が現象学の基礎にある。時枝『国語学原論』の次の記述は、彼が現象学的立場に位置していることを告白している。

以上の様に見て来るならば、観察的立場と主観的立場とは、本来言語に関する別個の立場であるが、その間には次の様な関係が見出されるのである。

『観察的立場は、常に主体的立場を前提とすることによつてのみ可能とされる』

即ち言語を観察しようと思ふ者は、先づこの言語の主体的立場に於いて、彼自らこの言語を体験することによつてのみ、観察することが可能となることを意味するのである。『正篇』28-29頁

時枝は、フッサールの哲学に傾倒していた。言語過程説に対する現象学の影響については既に指摘されていたが、時枝が自著でフッサールや現象学について直接言及しておらず、不明の部分が多かった。しかし、彼の論拠を注意深く読み込むと現象学からの影響が明らかに観察されるのである。また、時枝は、晩年（1967年）の講演で彼が山内得立訳『現象学序説』の影響を受けたことを告白したという¹¹⁾。

4 有坂秀世『音韻論』と現象学

古典音声学有坂秀世の音声理論は、西洋言語学の音韻論 phonology と大きく異なっている。伝統的な日本音韻学の伝統を自覚する有坂は、西洋言語学に存在しない「音韻」の概念を設定し、その定義を試みている。有坂の「音韻」は、具体的現実的表出たる音声とは違い、千差万別の音声を束ねる抽象的観念でもない。有坂によれば、音韻は人が発音しようとする目標、すなわち話し手が発音運動において理想とする観念である。音韻は、物理的実態でもそこから抽象した観念でもない純心理的観念である。有坂は言う。

まづ私が自分の発音について観察した所を述べると、普通の場合「青」は [ao] であり、「赤い」は [akai] であり、「土産」は [mijaŋe] である。[a] [ä] [a] [æ] の性質は皆それぞれに違ふ。併しごく注意して丁寧に発音する時には、「青」は [ao]、「赤い」は [akai]、「土産」は [mijaŋe] に變つて、皆一斉に [a] となつてしまふ。これは何故かといふと、元来私の頭の中にある理想即ち目的観念は一種の [a] なのである。注意がよく緊張してゐる時にはこの理想が充分に実現されるけれども、注意が散漫になつてゐる時には発音運動が充分に行はれず、種々の事情の影響を受けて [ä] [a] [æ] 等に墮落して行くのである。即ち上の [a] [ä] [a] [æ] 等は、客観的の音としてそれぞれ性質が違ふけれども、実は同一の目的観念の実現である。その意味に於て、上の [a] [ä] [a] [æ] 等の間に心理的連絡を認め、之を同一の phoneme に属するといふのは不合理ではないと思ふ。

（中略）

音韻観念はかやうに客観的音の諸性質の中たゞ一部分をしか具へてゐないものであるが、さればとて又その phoneme に属するすべての客観的音から共通性だけを抽象したものでもない。もしも音韻観念 α が単に [a] [ä] [a] [æ] 等の共通性のみから成る抽象的な概念であつたならば、これらを丁寧に発音する場合皆理想的の [a] に近づいて行くといふ事実がどうして説明されようか。

「音声の認識について」『音声の研究』第IV集、1931年

引用文の末尾に表明されている批判は、音韻を多様な物理的実現の共通性からなる抽象的概念であると主張した神保格の学説を対象にするものである。神保は、佐久間鼎とともに西洋音声学の紹介者であり、ジョーンズ D. Jones の音素音族説にも影響を与えた人物である。音韻＝抽象的概念説とはどのようなものであるのか。

例へば日本語の母音のアイウエオを論ずる時、問題になるのは誰が何時何処で発した声であるかといふ事よりも寧ろ「ア」なら「ア」といふ音声の質である。言い換へれば多くの人が多くの場合に発した「ア」といふ声の中に共通に含まれた性質を主として問題にするのである。吾々が「ア」といふ音の観念として心に記憶して居るものは、多くの人多くの場合の具体的「ア」（各人固有の声色をも含んだ）を屢聞いてその中から抽象した観念である。故に「ア」といふ音の研究には、此の記憶したものを研究することが一つの仕事であり、且一方には多くの人多くの具体的「ア」を聴いてその中に含まれた常住的要素を研究するのが一つの仕事である。

神保格『言語学概論』（岩波書店、1923年）

ここで表明されているのは個人の経験を越えた客観的な音声観念であり、有坂はこの点に批判を加えるのである。おそらく有坂によれば、諸個人の経験を越えた純粋に客観的な観念など存在しない。有坂が重視するのは、音声（音韻）を把握する際の主体の心的経験であり、これがもっとも確実な認識対象となる。有坂によれば、「音韻」はこの確実に把握された発音運動の理想すなわち「目的観念」である¹²⁾。

世界を観察するに際して、主体の経験が絶対的に疑うことの出来ない確実なものとして了解される。このような純粋経験から世界解釈が始まるとする立場は、優れて現象学的である。有坂の音声理論は、その論法から見てドイツ哲学を参照したと考えるのが自然である。主体的経験を重視する有坂の音声理論を時枝は高く評価していた。時枝は言う。

次に既に述べた所の音韻 *phoneme* の論についてみるに、観察的立場は、当然主体的立場を前提としなければならないとするならば、言語の音声研究の対象は、観察者の感覚に直接訴へる処の音声表象、或は物理的生理的特性ではなくして、この言語の主体的意識に於ける音声を対象とすることでなければならない。主体的意識に於ける音声を対象とする処の方法は、既に述べた様に、観察者が自らこの言語の主体としての経験を経なければならぬのである。言語の音声を他の音声と区別し得る根拠は、その音響的特質に存するのではなくして、実にそれが主体的であるか否かに存するのであつて、主体的立場を無視した音声研究といふことは、そのこと自身が既に矛盾を含んでゐるのである。

（中略）

かくして特に音声論と音韻論を研究対象の相違から対立させる必要はない。従来の音声研究には、屢々この立場の混同があつた。音韻を音の一族であるとする考方や、

抽象的音声であるとする見方は、主体的意識を除外した観察的見解であり、音の理念とする考方や、言語音を区別する示差的性質のものとする見方は、寧ろ主体的立場であるといへるであらう。しかもこれらの所説には、未だ明かに立場の相違についての弁別が存在してゐなかつた。真の観察的立場は、主体的立場を前提としなければならないことを明かにすることによつて、右の音韻に関する見解の是非を決定することが出来ると思ふのである。

時枝『国語学原論』32-33頁

上記の「言語の主体的意識に於ける音声を対象とする」立場が有坂の理論を指すことは明白である。時枝は、有坂に同意して「音韻を音の一族とする考方」（ジョーンズの音族説 *phoneme, as a family of sounds* を指す）や神保の「抽象的音声」説を「観察的見解」として批判するのである。時枝は、有坂に対して共に経験主体を重視する立場の理論的同志として共感したのであろう。

5 伝統的日本語研究と西洋哲学

山田孝雄は「単語」と「文」、時枝誠記は「言語」、有坂秀世は「音韻」の概念規定を行うに際して、主体の経験の確かさだけを唯一の拠り所にした。彼らの思索には、「存在」なるものの根本的意味を問う西洋形而上学からの影響が色濃い。主体的経験の絶対化ということから言えば、西田幾多郎『善の研究』（弘道館、明治44年1911刊）における「純粹経験」「直覚的経験」の概念も忘れることが出来ない。

今もし真の实在を理解し、天地人生の真面目を知ろうと思ふたならば、疑い^うるだけ疑^つて、凡ての人工的仮定を去り、疑うにももはや疑い^うようのない、直接の知識を本として出立せねばならぬ。我々の常識では意識を離れて外界にものが存在し、意識の背後には心なる物があつて色々の働をなすように考へている。またこの考が凡ての人の行為の基礎ともなっている。しかし物心の独立的存在などということは我々の思惟の要求に由りて仮定したままで、いくらでも疑えば疑い^うる余地があるのである。

『善の研究』岩波文庫、60-61頁

上記引用における「直接の知識」について西田は、別の箇所^で次のように説明している。

さらば疑うにも疑い^うようのない直接の知識とは何であるか。それはただ我々の直覚的経験の事実即ち意識現象についての知識あるのみである。

『同書』62頁

時枝と有坂が『善の研究』を参照することはあり得たと思われるが、今のところ詳細は不明である。ともかく上記の西田の存在論的認識の記述は、ドイツ観念論哲学を忠実に継承するように見える。西田の門人である下村寅太郎は、岩波文庫本『善の研究』「解題」において西田の「純粹経験」について次のように述べている。

純粹経験という言葉は恐らく当時の流行思潮であつたウィリアム・ジェームズその

他から由来するものであろうが、しかし『善の研究』における純粹経験の思想は、これに示唆されたとしても決してこれに由来するものではない。

『同書』「解題」251-252頁

「純粹経験」の思想が西田の独創とする弟子筋の見解の妥当性については措くとしよう。筆者が注目するのは、「純粹経験」が明治時代当時の「流行思潮」の言葉であったという証言である。ものごとの「存在」の認識に関するこのような接近法は、明治時代後半以降から昭和前半期にかけての青年知識人の共通理解であった。

山田、時枝、有坂の三人は、近世以前の古典学的語学の伝統を担うことを自覚していた点で共通の資質を持っている。日本語研究の近代化を推進した研究者は、彼らのほかにも大勢存在するが、研究対象の理論的純化に徹底的に拘泥した点において彼らは突出している。彼らは、何故共通してドイツ観念論に理論的な拠り所を求めたのであろうか。彼ら三人に共通する資質とは何であつたらうか。

形而上学者は、我々が「自然に生きているとき」には我々の外側にあると思われる事物であっても、ひとたび真実を把握しようとするときには、その「存在」から慎重に身を引いて自らの経験を純化し、それを経験表象として肯定する。純化された経験から出発して世界を解釈するという哲学者の論理構成が、伝統的學術の維持と近代化に鋭敏な危機感を持つ山田らの学問的熱情と理性を支えたのではないか。次々に押し寄せる外来理論に対する疑念は、彼らの危機感を増幅したであろう。

念押しになるが、山田、時枝、有坂が行った「単語」「文」「言語」「音韻」などへの考察は、それらの客観的存在証明ではない。今日の理論言語学においてすら、単語、文、音素などの存在論証は与えられていない。唯一「科学的」な批判に耐えうるのが形態素であろうが、言語をめぐる諸経験は科学の他分野の研究対象に比して、かくも甚だしく分散的である。

我々にとって、記述の便宜上、単語や文や音素があたかも観察者の外側に存在するかのように振る舞う方がこれらが未論証の概念であると強調するよりも効果が上がる。この点を研究者の多くが理解するならば、我々の研究に一層の深みを与えてくれるだろう。

注

- 1) 橋本進吉『国語音韻の研究』および同書、亀井孝「解説」(岩波書店、昭和25年1950)
- 2) 山田孝雄『日本文法論』第一部「語論」(宝文館、明治41年1908)
- 3) 拙稿「山田文法における「統覚作用」の概念の由来について」『國學院雑誌』第108巻、第11号(2007年)
- 4) 時枝誠記『日本ニ於ル言語観念ノ発達及言語研究ノ目的ト其ノ方法(明治以前)』(明治書院、昭和51年1976)
- 5) 根来司『時枝誠記研究 言語過程説』(明治書院、昭和60年1985)
- 6) 有坂秀世『音韻論』(三省堂、昭和15年1940)
- 7) 加藤尚武編『哲学の歴史』第7巻(中央公論社、2007年)143頁～
- 8) 黒積俊夫『カント批判哲学の研究——統覚中心的解釈からの転換』(名古屋大学出版会、1992年)
熊野純彦『西洋哲学史——近代から現代へ』(岩波新書、2006年)133-134頁。
- 9) M. Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik, Bonn, 1929 (ハイデガー『カントと形而上学の問題』門脇卓爾ほか訳、創文社、2003年)
- 10) 拙稿「ソシュール『一般言語学講義』と日本語学」松澤和宏編『ソシュールとテキストの科学「統合テキスト科学の構築」第9回国際研究集会報告書』(名古屋大学大学院文学研究科、2007年)
- 11) 注5) 前掲書
- 12) 拙著『古代日本語の形態変化』第一章(和泉書院、1996年)、拙著『近世仮名遣い論の研究』「序章」(名古屋大学出版会、2007年)、拙稿「ソシュール『一般言語学講義』と日本語学」松澤和宏編『ソシュールとテキストの科学「統合テキスト科学の構築」第9回国際研究集会報告書』(名古屋大学大学院文学研究科、2007年)、拙稿「トルベツコイの音韻論と有坂秀世」加藤正信・松本宙編『国語論究第13集 昭和前期日本語の問題点』(明治書院、2007年)

